読者のページ

スキルアップのための出向のススメ

株式会社建設技術研究所／中部支社
グループ長
堀田 大貴　HOTTA Taiki

❖はじめに

建設コンサルタントの技術者は、最新の知見・技術で最適なインフラ整備に貢献するため、継続的な研鑽が求められる。このことは、業務受注にあたりほぼ必須条件の資格となっている技術士において、資質向上の責務として規定されていることである。専門領域の知識を深めるほかにも、急速に進みつつあるDX（デジタルトランスフォーメーション）への対応など、技術者としてスキルアップを図るべきことは多い。スキルアップのやり方はさまざまだが、建設コンサルタント業務を行うなかで行き詰まりを感じていたり、大きくステップアップしたいと考えている技術者の方々に対し、「出向」がスキルアップの強力な方法となりえることを、私の経験から紹介したい。

❖働きながらスキルアップすることの難しさ

さまざまな能力が求められる建設コンサルタントの仕事は、一定の技術力やノウハウを獲得するために長い期間を要する業種である。業務をこなしながら、求められる能力をOJTで磨くことがスキルアップの基本となる。しかし、類似した業務ばかり対応していると、能力が向上する速度の鈍化は避けられず、また、同じ会社、同じ部署で長年従事すると、スキルアップの限界も見えてきてしまうかもしれない。

専門とする分野の技術力向上のため、自分の興味のある学会への参加や専門書や論文の通読（いわゆるOff-JT）により知識は増やすことはできるが、それを活用する業務と巡り合わないと自己満足に終わってしまう。興味がある分野を勉強すること自体は、他者から批判されるものではないが、技術者である以上、実務の質の改善につながるようなスキルアップを目指す必要がある。経験上、Off-JTで得た知識は忘れやすく、いざ知識の出番！というときに思い出せないことは数多い。

今の世の中の流れはWLB（ワークライフバランス）であり、いかに効率よく業務をこなし、時短を達成するかが問われている。相反してスキルアップにはそれ相応の時間がかかる。多くの技術者が直面している問題と思われる。技術者たるもの、退社後や休日のプライベート時間を返上して自己研鑽に励むべし、と声高々に叫んでも、多様な価値観が受け入れられる昨今、このような体育会系のノリを求めるのは時代遅れである。公私のバランスをとりながら、いかにスキルアップの時間をつくるかが、重要な命題となっている。

❖土木研究所への出向経験の紹介

出向は所属する会社に籍を置きながら、定められた期間、別の機関で業務を行うものである。通常業務から強制的に離脱し、異なる環境で働くという力技ともいえるが、それだけに大きなスキルアップが期待できる。ただし、得られるスキルは出向先で取り組む内容次第である。私の場合、当時の上司からの「土木研究所の自然共生研究センターで勉強してみないか」という突然の打診で出向先を知った。私は主に建設環境分野に従事しており、幸いにも同一分野の研究を行っている研究機関である。同センターが保有する大規模な実験河川（写真1）も魅力的に見えた。自分だけが業務から離れることへの不安や後ろめたさ、通勤時間が倍以上になることなど、懸念材料がないわけではなかったが、断る理由にはならなかった。このような経緯でそれほど迷うこともなく受諾に至り、2年間の出向がスタートした。

写真1　実験河川
実験で使う石の下準備に利用した実験河川。その規模は世界最大級

出向でどのようなメリットを得られたか、回想して紹介する。

ここでしかできない実験

水流を作り出せる大型水路で魚の動きを水路横から好きなだけ眺められ、アユの採餌生態の一端を解明する研究に取り組んだ（写真2～4）。その過程においては、うまくいかないこともあったが、他の研究員の力を借りてなんとか一定の成果を得た。復帰後の業務でその成果を活用することもできた。研究成果はもちろんであるが、魚の行動のような暗黙知に近い情報は、例えば、漁業者とのやり取りなどのふとしたときに話のネタとして役に立ったりしている。

文章作成能力アップ

研究成果の論文化にあたり、共著の研究員から厳しくもありがたい指摘をたくさん頂いた。限られた紙面で結論までわかりやすく導く論文の作法を学び、文章を書くという作業がいかにテキトーだったかを知った。ここで得た作法はその後の報告書作成に生きている。ちなみに、自らの実力を鑑みず英文誌への投稿に果敢にチャレンジして3度のリジェクトを受け、学術世界の厳しさ（自らの実力不足）も知った。

対象領域の研究の今を知る

同種研究の論文レビューや関連学会への参加を通じ、取り組んでいる分野でどのようなことが調べられていて何がわかっているかという当該分野にお

ける研究の現状を知った。これは通常業務に従事しながらでもできることの一つだが、研究員との日々のやり取りのなかで最新情報も交えた議論によってその理解が深まったことは間違いない。

調査スキル

他の研究員の調査研究にも同行し、他の方の研究にも触れながら、業務ではあまり採用しない調査手法を経験。職場復帰後に担当した調査で効果的に取り入れることができた。これはわかりやすいメリットである。

有識者の考えを知る

専門研究員、交流研究員合わせて10名ほどと席を並べ、研究へのアドバイスをもらったり、日頃の雑談・情報交換をしながら仲良くさせていただいたりした（と思っている）。そのなかには、行政が所管する委員会の委員を務める研究者もいる。業務では有識者としてヒアリング対象となるような方々である。そのような方が、普段、どのような研究をされていて、どのような考えを持っているのか、という背景を知れたことは、その後の仕事のやりやすさにつながった。

写真2　筆者が実験を行った実験水路
実験条件を整えるまでの準備の大変さは想像以上であった

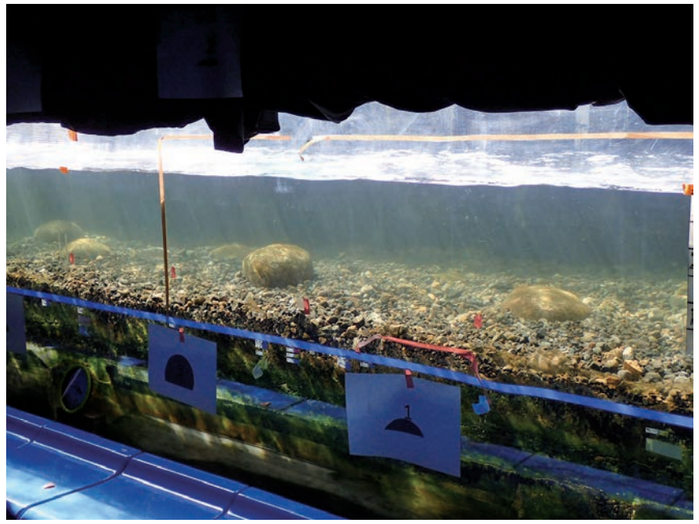

写真3　実験水路の横からの眺め
屋内の観察棟で快適に観察が可能。筆者は河床の状況を操作した実験を実施

❖専門性を持つということ

建設コンサルタントの技術者がたまに聞かれる質問「ご専門は何ですか？」。出向前は、明確に答えることができなかった。自然環境に関する仕事を10年程度経験し、業務を進めるノウハウはある程度、会得していたにもかかわらず、得意と言えるものがなかったわけである。そんな私が2年間の出向経験で一つのことにじっくり取り組むことで、ごく限られた分野ではあるが専門分野を持てたと自覚できた。このことは、その後の業務に取り組む際のさまざまな場面での自信につながり、私自身としては非常に意味があった。ここでいう「専門性を持つ」というのは、特定の分野をできるだけ深掘りすることで得られるものであり、さまざまな場面で応用できる能力を身に付けることであり、そしてなによりそれらを得た暁には自身の技術力に自信を持つことである。もっと知りたいという能動的な技術向上のモチベーションが働き、関連情報に対するアンテナの感度も高くなる。これらはすべて出向の賜物である。

出向して自らの希望する分野の仕事ができるという保証はないかもしれない。ただ、全くの異分野となる出向先が選ばれることはないだろうし、仮に少し異なる分野への出向だったとしても、物事がわかるようになるとだんだん面白くなってくるはず、である。新たな技術のほとんどは、いろいろな技術の応用であることは周知の事実である。新たな専門性を獲得すれば新たな視点が生まれ、プラスに働くと思う。

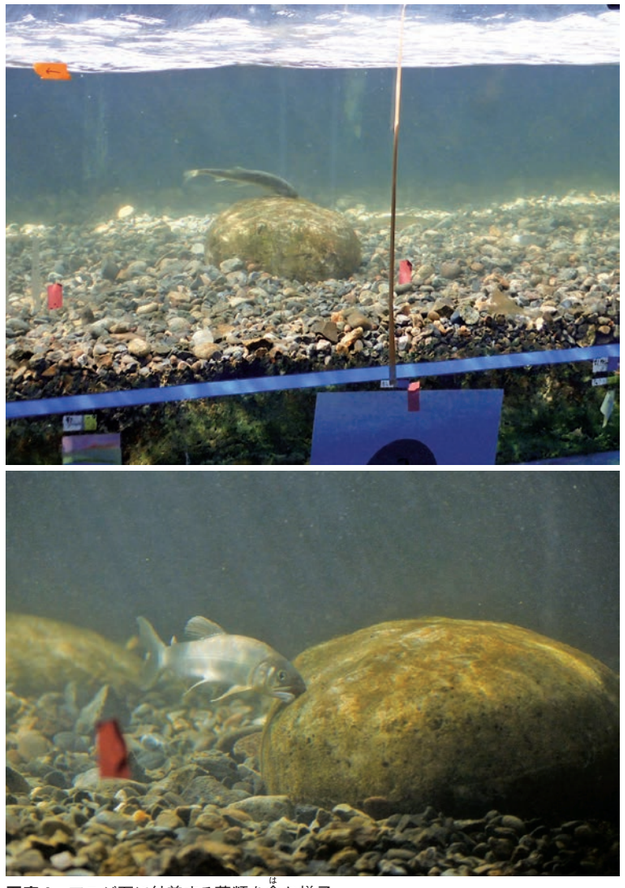

写真4　アユが石に付着する藻類を食（は）む様子
顔が曲がるほどの勢いで石に衝突して餌（藻類）を採る瞬間を撮影

❖そして、やっぱり人とのつながり

出向による大きなメリットとして、新たな人的ネットワークを築けることを挙げたい。得た知識や自ら解明した知見は、それはそれで成果として重要であるが、その後も続く研究者の方々との関係が継続的なスキルアップをもたらしてくれる。それまではただ聴くためだけに行っていた学会は、懐かしい研究仲間と再会できる場所となり、研究の最新情報を教えてもらえたり、ときには、技術的な悩みの相談に乗ってもらえたりする。出向中に携わっていた研究の続きで、論文の共著に声をかけていただいたこともある。知っている人が書いた論文を見つけたら、ちゃんと読んでみようかなと思ったりもする。研究者とのつながりがスパイラルアップへ導いてくれる。残念ながら私はそのチャンスを生かし切れていないが、目の前にチャンスが転がっているのはわかる。

❖今の技術者人生で行き詰まっている方へ

出向すれば、今それなりに安定しているであろう生活からいったん離れ、全く新しい環境に身を置くことになる。それによって失うものもひょっとしたらあるかもしれないが、きっと得るもののほうが大きい。

研究機関であれば、コンサルタント技術者としてのスキルアップは十分期待できる。私の場合、技術者人生の起点になったことは間違いない。

出向のススメを無責任に綴ったが、そもそも出向とは会社からの業務命令を受けて初めて実現するものであり、技術者個人が希望したからといって実現できるものではない。そんな簡単に言うなよ、という反応が返ってきそうである。私の拙い経験話で会社の技術者育成戦略が大きく変わるとは思いにくいが、こんな歩み方もあるんだなくらいに読んでいただき、もし、会社から出向の話を持ち掛けられたときには、前向きに考えられる手助けとなれば幸いである。

<写真提供>
写真1～4　筆者